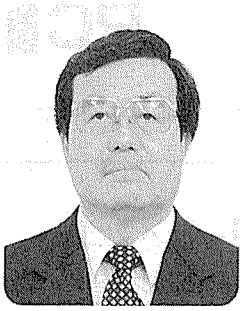
巻頭言

近未来型オフィス



市川　義博*

手紙で読み，話では聞いていたけれども，実物を見てやはりフーンとうなった。在宅オフィスあるいは在宅会社のことである。

約30年前，アメリカの大学に留学していたときに講義を受けたHさんが，その後大学をやめて連邦職員として長く勤めた後に，数年前に独立して交通関係を専門とするコンサルタント会社を作り経営を始めた。といっても，社員は奥さんと二人だけで，自宅をオフィスとし，奥さんを社長としたこと（これは税制の関係でらしい），仕事でアメリカ国内を飛びまわっていることなどを，時々の手紙で知らせてくれた。しかし，直接見たわけではないので実態は分からず，自宅でどのように仕事をするのかについては漠然と想像するだけだった。

先頃再びアメリカを訪れた折に，Hさんに呼ばれて自宅を訪れた。北部の大都市ボストンの中心部から一般道を北西に向かい，皇太子妃が高校時代を過ごしたという美しい町ベルモントを通り過ぎて約30分でコンコルドに到着する。コンコルドは人口3万人ほどの小さな郊外都市で，18世紀のアメリカ独立戦争の開始された町として知られている。Hさんの家は，町の中心部から（といっても数十軒の家屋がかたまって建っているというような感じのところだが）5分くらいのところにあった。なにしろまるで森の中で，通りからは樹木の合間に家の一部が見えるだけだった。いってみれば，軽井沢の別荘にオフィスを構えているという感じであろう。

Hさんの家はリゾートハウス風の大きな木造で，2階が生活の中心になっており，入口，居間，寝室，食堂，台所などのほかにHさんのオフィスがある。段違いのような構造の階下には奥さんのオフィス，3つの客用の寝室，大きな食堂などが作られている。2つのオフィスには，本棚に囲まれた机の上にデスクトップのパソコンがセットしてある。顧客との打合わせや，一緒に仕事を請け負っている仲間のコンサルタントとの相談，文書や図面の交換など，仕事のほとんどはこのパソコンを通じて処理するとのことであった。一日に数十通のメールを見て必要に応じて返事を送るとのことで，まさにインターネットがあって初めて可能なオフィス形態である。ただ，やはり直接会って議論をしながら仕事を進める必要が時としてあり，その時のために客用寝室が用意してある。つまり何日か仲間が泊りがけでやってきて共同作業で仕事を行うわけである。

在宅オフィスの良さは，当然ながら，時間を非常に有効に使えるという点であろう。ただあまりに便利なのでともすれば働きすぎになることがあるとHさんは笑っていた。奥さんは技術屋ではないから，恐らく経理などの仕事も受け持っているのだろうが，必要があると下から大きな声を出せばOKだとこちらもニコニコしている。

わが国にも仕事の分野によっては在宅オフィスも可能だろうし，SOHOなどという用語が使われ出し，もうすでに一部ではそのような例も実現していると聞いている。しかしわれわれの分野ではどうだろうか，などといっているのはパソコンを自由自在に使いこなしている人を横目で眺めているばかりの連中のやっかみといえるのではないか。パソコン，そしてそれを使うインターネットの発達は，われわれの想定外の使い方が考え出される可能性を生ずるに違いない。われわれもいつかはこのような仕事のやり方をするようになるのだろうな，しかし住宅状況が違うからなどといろいろ考えながらHさん宅を後にしたものである。

* *Yoshihiro ICHIKAWA*：本協会理事・(財)高速道路技術センター　理事長